

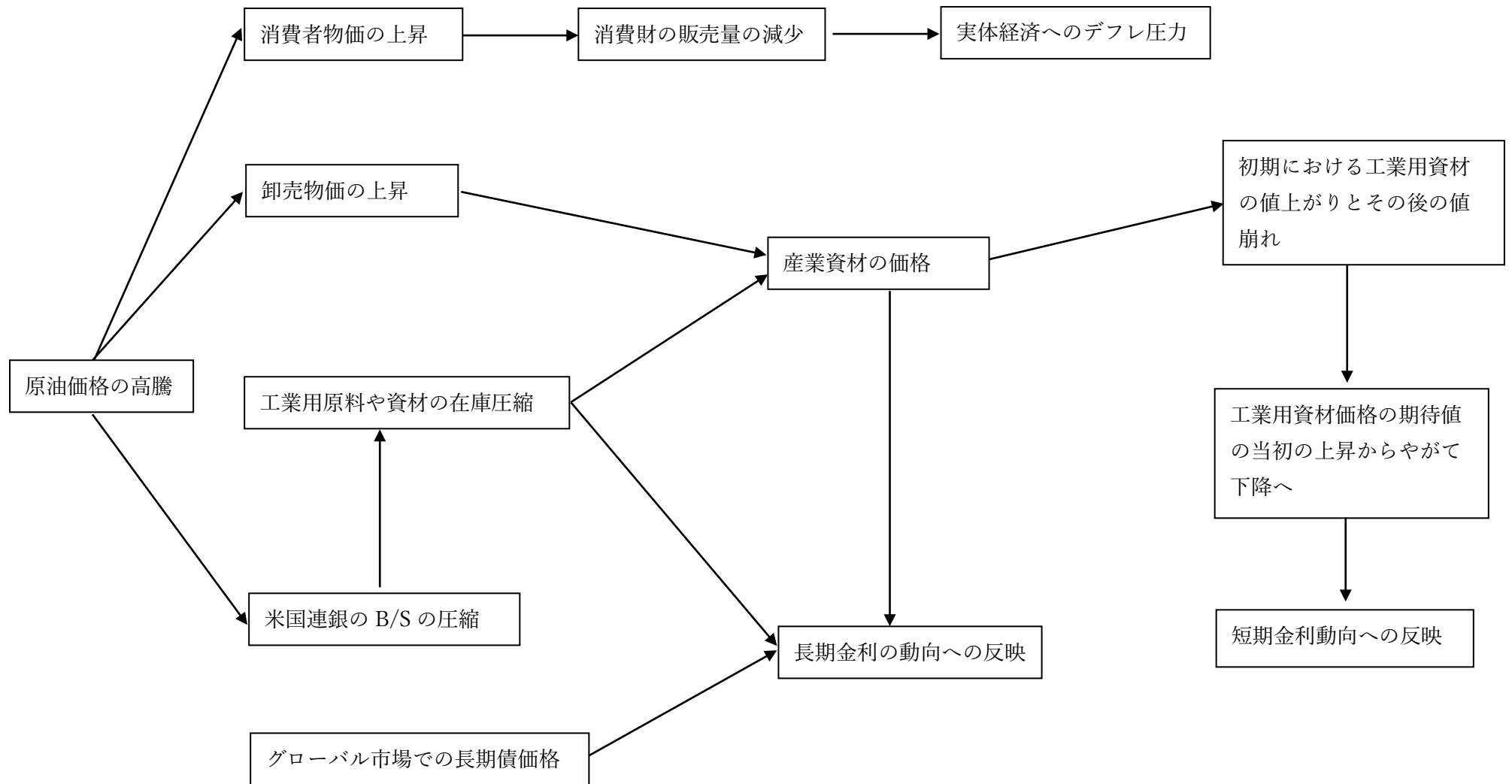
【参考】 田中直毅委員配布資料

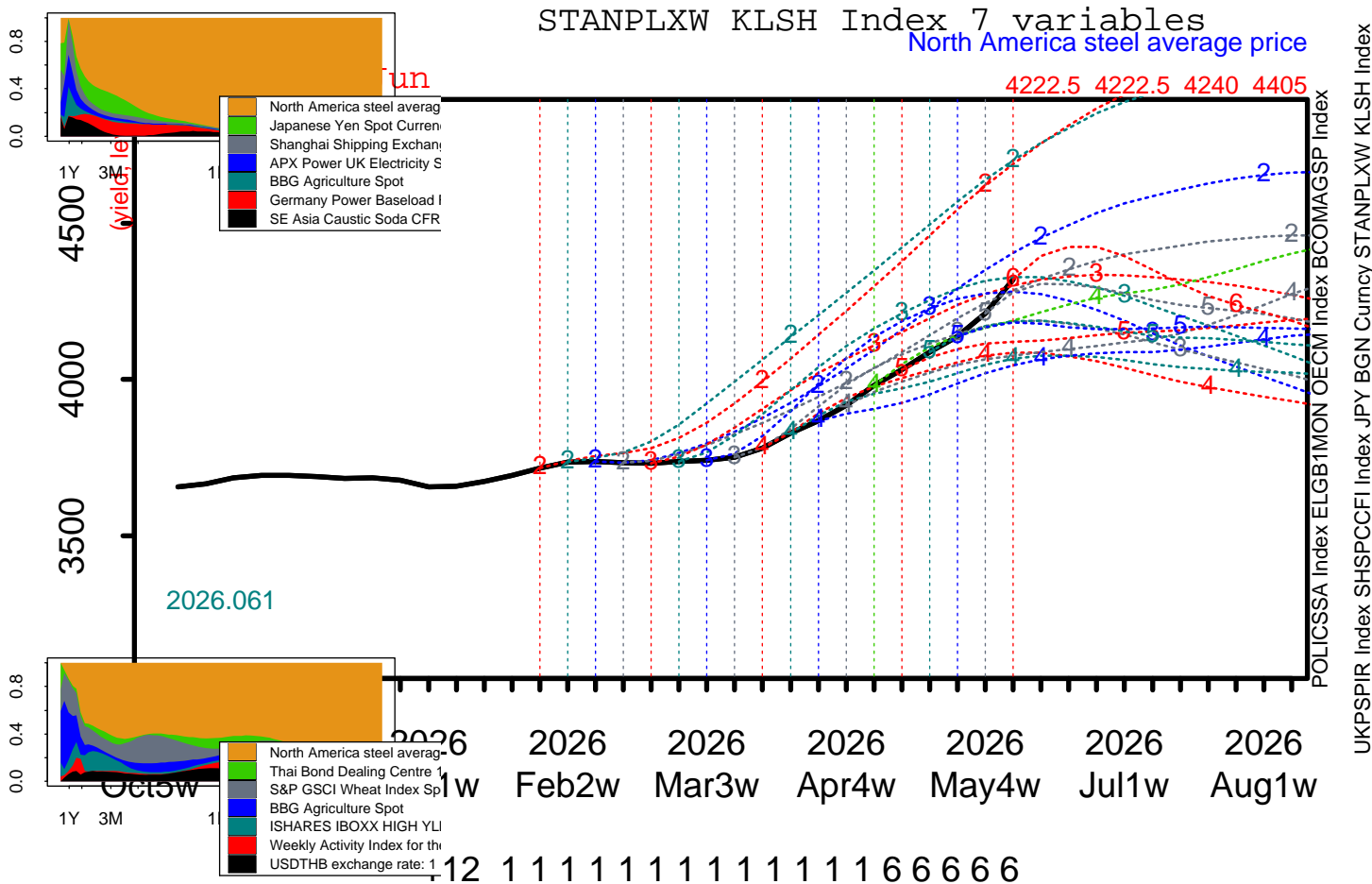
(要約)

2026年3月に入ると米国による対イラン戦争によって経済変数間に諸影響力が複雑に及ぶことになった。しかしこういう経済変数間のもつれ (entanglement) のなかで米国連銀は明確に自らのバランス・シートの圧縮に入った。6月第1週までの100日間はこれが観察された。そして経済変数間の entanglement のなかでこの連銀の政策姿勢は明瞭な影響を各経済主体に及ぼしたのである。本論文では多変量自己回帰 (MAR) モデルの作成を行い、赤池情報量規準 (AIC) を使って現実経済の変貌を追い求めるなかで、時系列モデルの変数と次数の絞り込みによる remodeling を繰り返した。探索を続け、そして利用できるモデルの暫定的決定という手順を繰り返した。その結論は6点に集約できる。

- 1) 米国連銀は B/S の圧縮を通じて、明確な政策姿勢を伝えようとした。
- 2) この連銀のメッセージは、事業者に向けたものと解することができる。一般にはインフレ期待が膨張しているといわれるなかで、彼らは資材や原材料の積み増しに対して慎重であった。
- 3) 長短金利はインフレ期待の膨張のなかで上昇すると考えられたが、現実は決してその反映だったとはいえない。短期金利の低下局面も到来したし、長期金利も一本調子の上昇とはいえなかった。
- 4) 米国の労働市場では強い労働需要が続いたが、AI 関連の活動の活発さだけで説明できるわけではない。
- 5) 日本銀行の B/S の推移からは、原油情勢の逼迫に対する政策姿勢と思料されるものは観察されていない。
- 6) 中国経済の停滞局面が東南アジアの景況感にも反映するようになり、東アジアにおける原油関連以外の資材価格は決して一本調子の上昇にはなっていない。日本にもこれが及んでいるが、政府や日銀による政策姿勢の反映と解せるものではない。

米国における因果推論と変数間のもつれ





data.mat.id.all.260608.2
 comm.weeklydata5412w26.2

list2512.8s95
 list2512.8s95

2023 0

想定される疑問とそれへの回答を通じての多変量時系列モデル (MAR) の特徴の表示

I データ処理から始まる帰納法的因果推論への道

- 1) decomp method による季節調整や雑音処理によって統計データを因果推論の素材に値するものとするプロセスが不可欠
- 2) トレンドを外して周期的変動の部分を抜き出し、尤度 (あてはまりの良さ) の改善を目的とした変数選択の繰り返しのなかから、因果推論の骨格を産み出す過程とみなす
- 3) たとえば6カ月前に相当するデータとの比較で現状の記述を行う。(図1と図2) (一方で米国連銀のB/Sの推移を実績値の推移でとり、他方6カ月前の変化幅との比較を行えば、現状の特性はより明瞭に記述できる) そしてこうした特性は、伝えるべき対象には届いているとの仮説についての検証命題を浮上させる

II 得られた因果推論の結果を利用するに当たっての探索のもつ意味

- 1) まず尤度を尺度として modeling を行い、予測経路の導出を行う
- 2) その後の実績値が予測経路を外している場合は、その差は情報量を示すと受け止め、remodeling の開始のサインとなる
- 3) このとき AIC (赤池情報量規準) は、変数や次数の選択にあたっての尺度の意味をもつ。結果として探索を続けたのち、利用の局面の到来を期す

III advanced AI、そして world model への道

- 1) entanglements (もつれ) のそれぞれの局面の model 化を目差す
- 2) facts を説明する model の作成に当たっては、新 data の入手、ならびに data 間の関係に関する表現形態についての工夫が必要
- 3) 諸モデルによる接近手法を通じて状況の記述の精度を高める
- 4) advanced AI への接近が期待されるので、AIC を使った変数や次数の再選択を行うべく、model 組み替えにかかわって、AI の組成へと踏み出す

CERBTCL Index 7 variables
Federal Reserve Total Liabilities & Capital Weekly Level

6728502 6713643 6704383 6711495

